

## 77 誌上発表

## 『鍼灸廻洄集』について

岩田源太郎

日本鍼灸研究会

『鍼灸廻洄集』(以下『廻洄集』)は、元禄七(1694)年の3種の序文を附して翌年に刊行された、全3巻の漢文体の鍼灸書である。今井近知の序文には、著者・高津敬節は浪速の三代続いた医家の生まれで、東武に移り住んで医業を行ったとあるが、現在の所、それが著者について知ることのできる全てであると言ってよい。なお宝永七(1710)年に刊行された『鍼灸初心抄』は、本書の書題部分の板木を差し替えるとともに、当時著名な医家・岡本一抱に偽託した異名同書である。以下の検討には、『鍼灸医学典籍集成』第7冊影印の船橋市西図書館所蔵本を使用した。

『廻洄集』の上巻では診察(8項目)、鍼法(16項目)、骨度法(9項目)、部位名図(7図)、補瀉法(1項目)が論じられている。診察では先ず第一に腹診が取り上げられている。その方法は、胸腹部に五臓を配当するという、典型的な五臓腹診である。なお、中巻や下巻の病門別の治法の中には脈状の記載が散見することから、腹診を重視しつつも脈診を併用していたことが伺える。中巻では禁鍼穴(28穴)、禁灸穴(44穴)、十二経の五要穴を論じた後、17の病門別に治法が述べられている。下巻では、中巻に引き続き34の病門別に治法が述べられている。中巻と下巻の病門総数は計51門である。病門別の治法においては、各病門ごとに病證解説と鍼灸法の説明が行われている。病證は概ね1~8項目、鍼灸法は病證と選穴の2~13項目を併せた形で構成されている。

施術に使用されている鍼として挙げられているのは、一寸六分の金の毫鍼と、瀉血に用いる砭鍼(三稜鍼)である。鍼法には、浅深、補瀉、鍼刺取血、久留、砭針出血などの鍼の手技の記載がみられ、刺入深度は、五分を境に浅深がはっきりと区別されている。施灸の壮数については、五壮、七壮、二十壮、五十壮、百壮の記載が見られる。

『廻洄集』中には穴法についての独立した章は設けられておらず、治法中に穴名が出てくるたびに、穴名の後に割注で取穴法を記載する体例を取っている。治法に見える穴は、『十四経發揮』に準ずるのが200穴、阿是穴が5穴、計205穴である。なお、禁鍼灸穴1穴、禁鍼15穴、禁灸21穴が治法で使用されていることから、禁鍼灸穴の禁忌を必ずしもそのまま信奉しているわけではないことがわかる。治法に挙げられている穴数は1~10穴であるが、概ね3~5穴が使用されている。兪穴の主治に基づく選穴である。

『廻洄集』には、自序に「歴代鍼灸書を渉獵する」とあるように、書名や篇名、人名の徴引が少なくない。書名や篇名では、『素問』や『靈樞』『難経』『医学発明』『神応経』、人名では仲景、丹溪、河間、銭氏などが見られる。

既に述べたように、本書は漢文体で書かれているが、漢字には全て振り仮名が付されており、当時の穴名や病證などの呼称を知る上で、貴重な資料となっている。その一方では、誤読と見られるものも少なくないので、取扱いには注意を要する。

『廻洄集』の内容には、江戸初期の多くの流派鍼灸に見られる幾つの特徴、すなわち100穴前後の選穴や鍼法のみでの治療、独自の穴名といった要素は見られない。本書が著された時代、鍼灸は十四経脈理論と鍼法が完全に定着した時代であり、本書もまた、基本的に時代の趨勢である金元李朱医学を受容し、その上に鍼灸を展開しているということができる。ただし、経脈ではなく、腹診による五臓診を重視している点に、本書の真骨頂がある。腹診の重視は、古い時代の名残というにとどまらず、来るべき江戸中期以降の新しい医学と鍼灸の傾向を部分的に先取りしていると評価することができるかもしれない。